

10

日本軍が攻めてくる――

リリー・ラグーンズの接収を前に

ジエレミーたちは最後の晩餐を。

リフカーは自ら縫いあげた

真正共和国旗を掲げた。

ザヴィア・ハーバート

越智道雄訳

かわいそうな私の国



サイマル出版会

かわいそうな私の国

ザヴィア・ハーバート
越智道雄訳



サイマル出版会

サイマル出版会のめざすもの

*サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。

*思えば、人類は平和のために戦争を続け、世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらしたが、情報の同時性はまた単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。

*われわれは、こうした新たな誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようとするものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって、人間の条件を回復し、世界が平和に一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようとするものである。

*このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

(訳者紹介)

越智 道雄
おとみ みちお

明治大学教授。作家。1936年愛媛県生まれ。広島大学大学院を卒業。豪州のノーベル賞作家パトリック・ホワイトの作品を訳出するなど、新しい文学分野「コモンウェルス文学」の紹介者として、また第42回シドニー国際ペン大会には日本代表として精力的に活躍するほか、新進の小説家として創作活動にも励んでいる。豪日交流基金とオーストラリア・カウンスル文学局の奨学金を受け、78年4月から一年間、シドニー大学に研究員として訪豪。訳書にP・ホワイト『ヴェース』(サイマル出版会)、A・プリंक『アフリカの悲劇』、J・ミーカー『喜劇としての人間』、H・プリンスミード『青さざ牧場』など多数があり、作品集に『遺贈された生活』がある。
現住所・〒228 神奈川県相模原市相模台2-20-3

Japanese translation rights arranged with
William Collins Publishers Pty Ltd, Sydney.

日本の読者へ——ザヴィア・ハーバート

オーストラリア文学の記念碑——訳者まえがき

第1部 テラ・オーストラリス

おだやかな原住民の生活を打ち壊す

白人暴徒、泥棒、偽善者たち。

(1・2・3・4巻)

第2部 オーストラリア・フェリックス

白人の理想も、同じ白人の悪漢、愚

者に裏切られて。

(5・6・7・8巻)

第3部 屈辱の日

民族自立のための試練から逃げだす

烏合の衆。

(9・10・11巻)

* 主要登場人物 *

プリンティ マーティン・ディレーシー
とアポリジナル女性のあいだに生
まれた四分の一混血児。本書の主
人公。

ディレーシー、ジェレミー
マーティンと克蘭シーの父。リ
リー・ラグリーンズで鉱山及び牧場
を経営。本書の副主人公。

エスク將軍、マーク卿

大英帝国によって任命されたオ
ーストラリア軍最高司令官。

「大嵐ボブ」

ボブウィリディリディ参照。

オカダ船長 日本人の真珠採業者。

カピティ博士、カスバート

アポリジニ保護官。

カフィン、ディニー 巡査部長。

カリティ、ブライディ コン・カリティ
の妻。フィヌーケインの長女。

キャンデルマス、イールフリーダ（アル
フィ） アポリジナルの待遇改善にとり組
む女流作家。

クーツ、フェビアン 文化人類学者。

グラスコック神父 レオボルド群島のカ
トリック伝道師。

「チーフ」 「自由オーストラリア運動」
創立者。

ディレーシー、克蘭シー

ジェレミーの次男。キャットフィ
ッシュ牧場支配人。

ディレーシー、マーティン ジェレミー

の長男。ベアトリス・リヴァ牧場
支配人。プリンティの父。

デーヴィッド プロテスタント伝道所の

トラック運転手。アポリジナルと
日本人とのあいだに生まれた混血
児。

ナナゴー ジェレミー・ディレーシーの

二度目の妻。ハーフカースト。

ハナフォード、バット

列車機関士。共産党のデマゴーグ。

バーバー、ラム（アリ・バーバ）
インド人商人。

ビカリング判事 「北豪」最高裁判事。

フィヌーケイン、シェーマス（シェーム
ン・オン・アス）

ベアトリス・リヴァ・ホテル経営
者。アイルランド人。

フェリス、ファーガス

文化人類学者。パイロット。

ブルー、ヒリー 驢馬者の御者。

ホッフ博士、クルト ユダヤ人亡命者。

ボブウィリディリディ（「大嵐ボブ」、
アポリジニ） 「虹蛇」信仰のアポリジナル魔
術師。

術師。

マカスキー、エディ アポリジニ局役人。

マクフィー、フェイ パームストン・プ
ログレシブ紙記者。

マリジック親下 カトリック伝道所高僧。

「やつこさん」 「自由オーストラリア運
動」の職員。

ローゼン、リフカー

ユダヤ人亡命女性。

（アイウエオ順）

10

第3部
屈辱の日

23 章	22 章
峡谷に翻る真正共和国旗……………	メルボルンGHQ(続き)……………
125	1

第3部 屈辱の日

22章 —メルボルンG H Q (続き)

その次にジェレミーが目を開いたときは、明らかにこの前ほど早くは意識が戻ってこなかった。白い部屋に置かれた白いベッドの上に寝かされている。

ベッドからほど遠くない所に、半ば禿げあがった大男が椅子に坐って新聞を読んでいた。私服姿だ。つまりシヤツとズボンといういでたちで、上着は椅子の背にかけてある。

もう昼の日中で暑かった。開け放されたドアと窓ガラス越しに、そしてその向こうの金網越しに、晴れた青空が見える。しかしジェレミーが長いあいだ見つめていたのは、蛇腹のついた天井だった。

ジェレミー自身の姿もあまりよくは見えない。なにし

4

ろ頭から首にかけて繃帯でぐるぐる巻きにされていて、打ち身の跡がついた顔が四角く繃帯のあいだからのぞいている。ほかは、病院で使われる「拘束シーツ」と呼ばれる代物の、革紐で縛った袖口から両手が出ているだけだったのだ。

彼の目が窓の位置までおりてきたときでも、なんの表情も浮かばないところを見ると、なにか特別なことに気づいた様子はない。つまり青い空以外なにも目にはいないということ、この部屋の位置が高く、外の金網はここが柵で囲われたバルコニーだということだ。

ジェレミーが曲がりなりにも目がさめたのは、大男が新聞をガサガサとめくったときだ。彼はチラと右に目をやり、しばらくして首を横へ振り向けようとしたが、繃帯のせいでうまくいかず、今度は寝返りを打ったので、ベッドがかすかに軋み音をたてた。

男は新聞をおろした。充血した灰色の目が、いぶかしげに眺めやる澄んだ褐色の目と、長いあいだ見つめ合う。やがて男は新聞を床に落とすと、上着のほうをふり向いて、手帳をとり出すと、腕時計を見て、時間を記入していた。

それからまたジェレミーに目を戻す。ふたたび長いにらみ合い。やがてそれに疲れたように、ジェレミーは枕の上で首をごろりとまわし、目を閉じた。

息遣いがせわしく、軽く耳障りな音がまじるせわしい息づかいが、男の姿を認めてから一層速くなっていたのだ。いまやつとそれが鎮まった。ふたたび眠りに落ちる。椅子の男は数分間見守っていたが、やがてまた新聞をとりあげて頁を開いた。その音でふたたびジェレミーが目をさます。同じように、彼の身動きする気配で、男がそちらへ目を向ける。

今度は相手とにらみ合っているあいだに、ジエレミーは自分が拘束されていることに気づき、両手に目を向けてからそれらをパタパタ動かし、またカバーに隠れて見えないけれども両足が革紐で縛り合わされているのにも勘づいて、もそもそと動かしてみた。

男は新聞を持ったまま立ちあがつて、ベッドへ歩み寄った。ジェレミーは腫れあがつてひび割れた唇を開いて、なんとか口をきこうとあせつたが、かすれた小さな声で「ど、どうなってるんだ?」といったきりだった。

男は彼に背を向けて内扉のほうへと歩き出したが、そ

の拍子に尻ポケットにピストルの形が浮き出した。ジェレミーは寝返りを打って、相手を見守った。

その内扉はしまっていたが、ガラス扉で、ただそのガラスの中に金網が埋めこまれている。男はそれを開けるかわりに、壁の押しボタンに手をのぼした。

彼がまた椅子のほうへ戻りかけると、ジェレミーがふたたび小さな、しかし前回よりはしっかりした声でいった。「ハイ」は……どうだ？」

男は不機嫌な声で答えた。「口はきかないほうがいいぞ。いま医者がくるから」。彼は椅子に腰をおろした。

ジェレミーは黙らなかった。「お、お前は……だ……
だれた？」

男は新聞を盾にして会話を拒んだ。

小さな声が耳障りに続く。「けい……警察か」

新聞は動かない。

「わ……私はどうして拘束されているんだ？　おい……」

聞け……どうしてなんだ……」

戸口に音。警察の人間とおぼしき相手は、新聞を畳んで立ちあがった。しかし戸口まではいかず、つつ立ったまま、それが開くのを見守っている。

どちらかというとき、金髪がかった髪看護婦がは

いってくる、尻を使ってドアをしめた。そして男に親しげに笑いかけると、繃帯のあいだからのぞいている四角な顔に目を据えたが、その顔には病人の世話をする人間特有の職業的な微笑みみたいなものが浮かんでいた。

「ハロー」。彼女はいった。「やっとこさお目ざめてわけね、え？ それに口まできけるようになって！ さあ話してごらんさい」

「わ、私はどこにいるんだ？」

「上じゃない！」

彼女は叫ぶようにいうと、ロッカーのほうに振り向いて体温計をとり出した。彼女が口へ体温計をつっこもうとしたとき、彼が質問をくり返した。彼女が答えた。

「もちろん病院よ。さあ、口をきくのはそれだけで結構。口をあけてちょうだい」

それから彼女は彼の脈をとることに専念した。

体温計をひきぬくと、また質問が出てくる。「どれ……どれくらい？」

今度は彼の頭の上にあるカルテを見ながら、看護婦がいった。「もう口をきいちゃいけないっていったでしょ。

先生がまもなく見えるからね」

私服はパツと立って、彼女にドアを開けてやった。そして戻ってくると、おそらくまじまじと自分を見つめる灰色の目にもっと質問をしたがっている様子を見てどつたのだろう、新聞と椅子をひつ摺むや、バルコニーへ出て、そこに腰をおろした。そこなら相手を見張れるうえに、相手の小さな声が届きつこなかったからだ。

しばらくしてジェレミーは眠りこんだ。

彼はもの音で目をさました。私服がバルコニーから中へはいつてこようとしている。内扉が開きかけていた。剛い白髪頭のひょろりと背の高いのと、その脇に立つと小柄にみえる、やせた黒髪の若いのと、白衣姿の医師が二人はいつてきた。

二人のあとに看護婦が続いていたが、若いほうはさっききたほうで、トレイを抱え、もう一人はかなり年をとっている。看護婦たちはせかせかと医師を追い越すと、ジェレミーにとびかからんばかりにして、拘束シートと繃帯を外しにかかった。医師たちは話し合っていたが、この部屋の患者には目もくれず、閉じられた外扉のほうに顔を向けているところを見ると、明らかにすぐ前に見

た患者のことらしく、年上のはうは片手を脇の下へかいこみ、いま一方の手は皺のよった細かい頸にあてがい、これまた長細い指先でそこをなでながら、若いほうは両手をポケットにつこんで、話し合っている。実のところ、心もそらな感じで低い声でしゃべっていたのは年上のほうで、若いほうは短く返事をしてはうなずいていたのだ。

ジェレミーは腰から下までむき出されて、防水シートの上に横たわっていたが、胸にはギブス、左腕はこれまた石膏で固めてある。喉にはまだ直りきっていない切開跡があり、そこからは黒い縫合糸がきゅっとひき結んだ口のまわりに生えた頬髻のように、なん本もつき出していた。

陰囊にはガーゼがあててあったが、ばかでかいフグミたいに腫れあがり、黒、青、赤、緑とまだらに変色していた。こちらをひき受けたのは年上の看護婦だったが、ガーゼを外して局部をひと目見ると、目尻に皺のよった彼女の目が心配そうに大きく見開かれた。

看護婦たちが黙りこくって控えているので、年上の医師が前の患者のことをやっと頭から追い払った。そして

今そこにいる患者のほうへ向き直って、切れ長の黄色っぽい目でチラと一瞥し、相手の病状を値踏みしているようだったが、例の腫れあがった睾丸に目がいくと、「ああ！」と叫び、ガバとその上にかがみこんだ。

長細い人差し指をのばして、そのまだらな塊を触ってみる。ジェレミーはびくりと身を震わせた。ひょろりとやせた身体がほとんど折れんばかりにかがめられ、指先で触診をするあいだにも、アラビア人の三日刀月みたいな鼻がフンフンと、嗅診でもやりかねないほど。

若い医師は、鋭くよく動く黒い目で、先輩のやることを目で追っている。特に強くぐっと押したとき、患者がほとんどとびあがらんばかりに痛がり、息をえがせたので、医師はやっとこの魅力的な代物にはそれがくついている本体があるのだということに気がついた。黄色の目がチラと患者の身体の上を滑って、瞼の垂れ下がった眼窩の奥からのぞいている灰色の目とぶつかった。薄い唇が動いて、きつくはあるが、結構優しい声が出てきた。

「どうもこっちはあまりよくないみたいだね。しかしちゃんと直してあげるよ。ほかの所はどうか？」

医師は患者の上半身のほうへ移動して、蠟細工のように大きな黄色い耳を胸に押しつけていたが、やがて立ちあがると、いった。「ちゃんと動いとるな。さて喉はと」別の長い指が切開跡をまさぐる。「うん、経過は良好だ。では口をきいてくれるかね」

低いかすれた声で、「どうして……私は……拘束されているんですか？」

薄い唇が嬉しげに横へ広がった。「結構！ 声を元どおりにできるかどうか、あまり自信がなかったのね。この分なら徐々によくなるよ」

それから長い指をさつとこけた頬へあげると、微笑が消えた。「しかしあんたのきん玉のほうは気に入らないな。とり出しちゃったほうがいいと思うよ」

黄色い目がまじまじと見返している灰色の目と合うと、前者は細められたが、後者はありありと抗議の表情を浮かべて大きく見開かれた。医師はフグのほうへ目をそらせて、今度は顎をなでながら、しみじみといった。「若い男なら別だけどね。どっちにしても、遅かれ早かれ前立腺切除手術は受けることになるよ」

彼はまた微笑を浮かべて、さつと相手に顔を向けた。

「だからどうかね、親爺さん？」

かすれ声が小さく、しかしきつとなっていた。「嫌だ！」

黄ばんだ顔がかすかに赤くなった。笑っていた口は閉じられた。黄色い目は灰色の目から離れて、さつと若い医師と看護婦たちに向けられたが、その目つきは明らかにこういつていた。「まったく、毎度のことながら患者のわがままには手を焼くなあ！」

三対の目はすべてそれに同意した。すると年上の医師はまたフグの上にかがみこみ、ふたたびじっくりと眺めやり、いま一度ぐいと押して、ジェレミーをとりあげらせた。自分で納得がいくと、彼はジェレミーにまた目を戻した。「壊疽壊疽のことは聞いているね？」

ちよつと間があつてから、ささやくような声が出てきた。「私は……獣医です」

医師はまた嬉しそうな表情になった。「ああ……じゃあ私のいうことは分かるわけだよな」

「きょ……去勢されるのは……嫌だ」

医師は長い下唇をひっぱって、指を放すと、それはパチンと元に戻った。

「あんたはかなりひどい状態のうちへ連れてこられたんだよ、分かつてるね……いや、むしろ分かつてないのか。実のところ生きてたのがめつけないものさね……それもこの魔法の薬スルファニルアミドがあつたればこそでね」

彼はまた下唇をひっぱり、まじまじと自分を見つめている灰色の目に優しく顔をしかめてみせながら、自分のいったことが相手に通じるのを待った。

「あんたはものすごい臍胸になってかつぎこまれたんだよ。肋骨が三本折れて、うち一本が左肺へ深々とつき刺さつて、私がこれまで見た中でも一番ひどい化膿ぶりだった。肋骨の手当てをするかたわら、臍をポンプでぬきとらなきゃならなかったんだからね。」

困ったことに、あんたを最初に見た連中がけがの程度を見損なつて、手遅れになっていたんだよ……わずかな頭蓋骨折と腕にかかりきつていたわけだな。私にいわせりゃ……スルファニルアミドのおかげさ……喉、腕、胸部の状態……」

「それなら……それなら……寧ろも……直してください」

「それはだめさ……あれだけスルファニルアミドを投与

したのだから、直つてもいいはずなんだけどね。ここに気腫ができて……間違ひなく壊疽を起こしかけている。

あんたもきつと知つてゐるはずだが、壊疽となると、それに罹つた組織を生き返らせるか、切除するか、ふたつにひとつしかない。生き返る見込みはないんだ……この状態で、しかもあんたの年齢ではね。切除しなければ、生きのびられる確率は……そう、二パーセントってとかな」

双方の目がにらみ合う。ふたたびもがいてから小さな声が出てきたが、苦しんだあまり打ち身のできた顔の四角な露出部分から汗がバツと吹き出した。「嫌だ！」

医師は困惑の表情になった。「頼むよ、あんた……こっちはあんたの命を助けるためにあれだけががんばつただぜ……」

「嫌だ！」

ついに医師は怒り出した。ほとんど叫ぶような声でいった。「去勢されるなんてばかげた考えにとり憑かせたまま、むざむざ私の目の前で死なせはせんぞ」

「いっそ死んだほうが……まだ……宦官になるくらいなら……」

表情の変わりやすい医師の顔は、怒りの表情から訴えるような顔つきに変わり、口調もそのように一変した。

「ねえ、親爺さん……ベストを尽くすからさ……あんたらの文句じゃないが、顔の立つように切る、から……ある程度の腺機能は残るようにできるだけのことはする。それでどうかね？」

「そうになったら……私はいいい笑いのものだ……先生。嫌だ……嫌だ……嫌だ！」

医師の細長い頭がくりとうなだれ、左右に振られるうちに、つぶやきが洩れた。「なら、あんたは死ぬ。一週間以内に死ぬさ」

「先生は……いったでしようが……二パーセントのチャンスがあるって」

「一パーセントだ」

「それ……に……賭ける」

医師はまたもや他の者たちのほうにさっと向き直ったが、その困惑しきった表情は、もし演技なら一点非の打ちどころのないものだった。ちよつと間を置いて、彼は患者のほうを振り向いた。

「時間をあげるから、とくと考えてみなさい。しかしあ

まりゆつくりとはしてられないよ。壊疽は待つてはくれないからね。いや……これ以上、口をきくのはよそう。もうあんたは口をききすぎてからな」。彼は喉の切開跡をチラと見て、溜息とともにいい足した。「あんたが壊疽の味方をしてわれわれの敵にまわるつもりなら、こっちがいくらいい治療を施したところで水の泡だ」

彼は今度は完全に患者に背を向け、肩を落としてドアのほうへ向かいながら、もうどうでもいいという口調でつぶやくようにいった。「陰囊には当分グリセリン＝ベラドンナをつけておくように」

髪の小柄な医師は、先輩のあとについていきながら、ジェレミーに強い非難の視線を投げた。若い看護婦も外へ出ていく。年上のほうは、首に繻帯をまき直しながら、よそよそしくいった。「先生のいわれるとおりにしないなんて、あんたもほんとにばかだわねえ」

彼は喉元で動く相手の手を隔てて、小声でいった。「どうか……起こして……ください」

「なにをばかなことを」

若い看護婦が肥料みたいな匂いにする糖蜜状の代物は、はいた瓶を持って、戻ってきた。年輩のほうがそれを

リント布にしまして、それでフグのまわりを包みこんだが、終始毒蛇でも扱うような表情を浮かべていた。

二人がまた拘束シーツをかけ始めると、ジェレミーが小さな声でいった。「お願いだから……この代物をかけないでほしい」

「先生に訊いてみるわ」。年上の看護婦がいった。「手術に同意したと伝えてもいい？」

またしてもしわがれた小さな声が鋭く、「嫌だ！」と答えた。

きゅっと口をひき結ぶと、年上の看護婦はくるりと背を向けて出ていった。若いほうはしばらくあとに残って、悲しげな目つきで彼を見やると、首を振ってみせた。そして彼女も出ていった。外の戸口で見張っていた私服とおぼしき男は、バルコニーの椅子へ戻った。

ふたたび眠りに落ちるところか、ジェレミーは激しい動揺の徴候を示した。両手をばたつかせ、両足をうごめかせて、ギブスをはめられた胸と腕が動かせるかぎり、枕から頭を持ちあげようとした。

しかしまもなく、彼の動作にはひとつの目的がはいってきた。明らかに右手で腰に触ろうとしていたのだ。そ

のころまでには、私服はもう興味をなくして、新聞に目を戻した。

精一杯手をのばして、ついにジェレミーはシーツの上からばかりでかく脹れあがった睾丸を掴むことができた。それを握んだまま、彼は身をよじり、明らかに苦痛のあまりあえぎ、唸り声をあげた。やがて大きく溜息をつく、顔中に汗を噴き出させて、身体のをぬいた。

数分後にはドアがまた開いた。私服がパツと立ちあがって、室内へ戻ってくる。若い看護婦がトレイを抱えてはいってきた。

今度はすっかりジェレミーに愛想がよくなっていて、これまで彼に施してきた点滴のかわりに、高蛋白質のおいしいスープを少々持ってきてあげたと告げた。私服が手を貸して患者の upper body を起こし、寝台頭部の椅子の傾斜を調節してやった。

しかし看護婦が吸飲みを持って歩み寄ると、ジェレミーはそれから顔をそむけて、小さな声でいった。「自分で飲みたい……手を自由にしてくれたまえ」

「それはできないわ」

「どうして？」

彼女は肩をすくめた。「あなたは拘留中なのよ」

「な、なんの科で？」

「ここ数日間錯乱状態だったものね。どこか故障が残ってるかもね」

「じゃく乱なんかしていない……いまは」

「どうしようもないのよ。さあお飲みなさい」

「婦長さんがいつてた……先生に訊いてみるって」

「婦長さん、あたしにはなにもいってないわよ。さあ、早くして。こっちはいくらでもすることがあるんだから」

彼は諦めた。スープを飲ませ終わると、彼女はにこりとした。「おなかにものがはいると気分がいいでしょう、え？」

彼はげつぷをした。

「さあ、今度は気持ちよくしたげるわ」。彼女はそういい足して、彼の右肩からシャツを外すと、トレイからアルコールをとって、消毒した。

また小さな声。「な、なにを……するんだね？」

彼女は返事をせずに、蓋のついた皿から皮下注射用の注射針とアンプルをとりあげた。彼女がベッド脇に戻っ

てくると、彼が訊いた。「な、なにかね？」

「ただの痛み止めよ」

「モルヒネ？」

「そんなものね。あれ……なにをするのよ？」

彼は肩をすばめて、またシャツの中へ戻してしまった。そして首をふり、息遣いも荒くいった。「嫌だ……嫌だ」

「ばかなまねしないで！」

「注射はごめん」

彼は、肩を探りにかかる彼女の手から肩をひいた。

「これは打たなきゃいけないのよ。じたばたをやめないで、刑事さんに押えてもらうわよ」

ジェレミーは傾いた枕から身体をずりあげながら、小さな声ではあるけれど、ほとんど咆えるような口調でいった。「こりゃ不法だ……この拘束は……注射も……不法だ……私の……許可がなければ」

瞼の垂れた目が、身構えている私服をぎらりとねめあげた。

看護婦と私服はたがい目ませし合った。看護婦はいらだたしげに肩をすくめた。「オーケー……先生を呼んでくるわ」